

# 商 業 と 民 族

—— フェニキア人 ——

石 井 和 彦

## 1. フェニキア人の故国

「太陽の昇る処」、レヴァント (Levante)、それは、広くは東部地中海に属する諸島と沿岸諸国を含んだ世界だが、これをズームアップすれば、シリア・パレスチナ地域という多彩なオリエント史の歴史舞台の一つが浮び上ってくる。この地域は、西に接する地中海と東に位置する山脈との間に挟まれた、東西130～160km、南北650kmの、狭くそして細長い地帯である。<sup>[1]</sup> 現在ここには、シリア、レバノン、イスラエルの三つの近代国家がそれぞれ国を立てている。今でも硝煙のにおいは断えないが、往時から、レヴァントにはさまざまな民族と文化がぶつかり合い、入り交り、交代を繰り返してきた。それというのも、この地域はエジプトとメソポタミアという二つの巨大な文明圏を結ぶ唯一の街道でもあったからである。

われわれがこの稿で扱うフェニキア人 (die Phönizier) も、ここレヴァントに登場した諸民族の一つの代表である。古代フェニキア人が本拠にした地は、現在のレバノン共和国にはほぼ等しく、レバノン海岸に面した海港都市群から成っていた。その背後には、アンティ・レバノン (Anti Lebanon) 山脈が聳え、その山脈と海岸との間に南北320km、東西25km程の山麓地帯が置かれている。

往時の名だたるフェニキアの都市の名を北から南に順に挙げれば、トリポリ

ス(Tripolis), ビュブロス(Byblos), ベルタ(Berut), シドン(Sidon), テュロス(Tyros), これらは現在のレバノン共和国で, トリポリ(Tripoli), ジュバイル(Jubeil), ベイルート(Beirut), サイダ(Saida), スール(Sour) という名で呼ばれ, 昔日の名残りを留めている。

確かに現在のレバノン共和国は, かつての海洋国家フェニキアの故国であることに間違いはない。しかしフェニキア人の足跡を辿ろうと思えば, ここだけに留まるわけにはいかない。何故なら, 彼等の盛時の故国は地中海そのものであったからである。

地中海, それは, 西の大西洋に通ずるジブラルタル(Gibraltar) 海峡からシリア・レバノン・イスラエルの海岸まで長さ 3800km, フランスとアルジェリアとの間の距離を取れば 750km, ギリシャのサロニキ(Saloniki)とリビアとの間を取れば 800km, ユーラシア大陸とアフリカ大陸との間を東西に走る 300万 km<sup>2</sup> 程の海の盆地である。<sup>[2]</sup>

ここは昔から巨大な天然の流通経路であった。飛び石のように散在する島々, 穏やかな入江に囲まれた港町, 往古から世界のどの海も及ばない勝れた交通の機能を果してきた。

空間を目に見える線で結ぶ陸路とは違って, 海は何の痕跡も残さない。しかしそれでもわれわれは, ここに走った航跡を再現することはできる。航海の歴史は沿岸航路から始まったから, 地中海の穏やかな入江という入江には, 名も知らぬ航海者達が無数の根拠地を造ってきた。人々が北極星と小熊座を頼りに航海をするようになって, 航海者達は大抵は日のある中に陸に上がって休息を取らねばならなかったからである。いやそれよりもなによりも, この根拠地でもって取引が行われたのだ。こうした拠点群を結び合わせれば, 網の目のように張り巡らされた交易路が浮び上ってくる。この地中海の巨大な流通経路の建設と管理に最初に携わったのが, フェニキアの海洋民である。彼等はどの民族も思い及ばなかった壮大な海上国家を創り上げたが, それも今は, 地中海の

沿岸に残されたフェニキアの本拠地と植民地跡だけを残して、すべて歴史の中に没してしまっている。

フェニキア人は、紀元前2300年から2100年の間にシリア・パレスチナの東地中海沿岸に入り込み、ここにいくつかの都市国家を立てたセム族一派の総称である。その後、前12世紀以来、彼等は海上貿易に乗り出し、西はジブラルタルから大西洋へ、東はペルシャからインドまで航海し、地中海に巨大な海上帝国を建設し、しかもアフリカ大陸を周航した民族として知られている。しかし彼等は多くの点で謎の民族である。その大きな理由は、彼等がアルファベットの改良者、伝播者でありながら、自分達について何一つ後世に書き残さなかったからである。

もちろん彼等を知るいくつかの手掛りはある。一つは考古学的発見であるし、今一つは、この寡黙な民族について他の民族が書き記した記録である。フェニキア人については、エジプト人、ユダヤ人、ギリシア人、そしてローマ人が記録を残している。

フェニキア研究者達は、考古学的データや歴史的記録に基づいて、フェニキア像を描くためのさまざまな仮説をつくり出してきた。しかしこの稿では、フェニキア人の全体像を考古学、あるいは歴史学の立場から検討しようとするものではない。歴史学や考古学が再現したこれまでのフェニキア像を手掛りに、彼等が何故に同時代人からも、そして後世の人々からも交易民族、商業民族と呼ばれたのかという問題の検討に焦点を絞りたいのである。文明の交流に参加した、最も商業的な最古の民族の姿を追いながら、文明史の舞台で持った商業の意味を考えてみたいからである。

## 2. 商 業 と 交 換

さて、商業と一口に言っても、これにはいろいろな意味が含まれている。商

業もまた人間の歴史の所産だから、それは当然である。われわれは一般に商業をどのように理解しているだろうか。商業というとはまず、その大きな背景に供給群と需要群との間に行われる財貨の移転行為を置く習慣を持っている。そしてその背景の中から移転行為を媒介することによって営利を追求する企業活動と、この活動を自己の計算に基づいて組織的に行う商人と呼ばれる専門的な職業人を思い浮べるのである。

しかしこのような商業の理解は、すでに社会が交換という一つの分業統合原理によって統合され始めた世界を前提にして成り立っている。われわれの社会の歴史には、交換が分業社会の主要な統合原理でなかった時代も確実に存在したのである。その時にはもちろん商業も登場していない。商業の登場は、交換原理の発達に大きな関係がある。商業を語るために、交換について少し説明をしておかなければならない。

交換というと、まず財の有償的移転行為が理解されるが、これは人類の歴史の中では、共同体社会の間の集合的な行為として始まっている。これが長い時間をかけて次第に社会の内部にも浸透を始め、やがてこの財の移転行為が、社会の分業を統合する原理の一つに仕上がっていくのである。交換が社会的分業の一つの統合原理になっていくにつれて、その原理を支える一つの制度が準備されていった。それが市場である。

市場システムのなかった時代には、人々は共同体や社会によって位置づけられた成員として、与えられた役割を分担し、共同体や社会の意志の中で生きてきた。そこでは資源や生産手段は共有の財産として、それによって得られた収穫物は共同体や社会全体の成果として、互惠あるいは再分配といった分業の統合原理によって配分されていたのだ。

高級品や奢侈品の移転には、早くから交換が入り込み、有償的移転行為としての交換が共同体や社会の新陳代謝機能を促進していた。しかしこの場合、交換はまだ主要な分業の統合原理には至っていないのだ。市場が社会的な制度と

して用意されていくプロセスで、社会的統合の主要原理は、互惠や再分配から交換へと切り換えられていく。それとともに長い間共同体や社会と運命を共にしてきた人々が、その絆を解き放たれて、市場によって統合される分業世界に再編成されていくことになるのである。

かつて一人の人間によって具現されていた生産＝消費活動、あるいは数人の人間の手によって完結していた人々の生活は、交換が社会の統合原理に切り替わる分だけ、市場システムを介して分解されていくのだ。やがてそれは、奢侈品や高級品だけでなく、生活必需品のあらゆる領域にまで及んでいくことになるのだった。

市場システムを介して分解されていく人々の生活はまた、このシステムを介して統合されることになる。市場という分業の統合系が出来ていけば、ここには有償的移転行為を媒介する企業の機会も生まれる。

交換のレートが原理上、需要と供給との間で決定される市場制度の下では、この両者の関係を操作することによって営利を得る企業の機会も生まれる。また需要と供給との間に隔離が存在すれば、社会はそれを除去する役割を担う人間をつくり出し、彼等に利益の機会を保証させていく。

こうして企業としての商業が成り立っていくのだが、商業の存在とその発達によって、市場はその広がりや厚みを増し、社会的分業の統合に占める交換のウェイトは一層高められていくことになるのだ。

しかし人々が村落共同体や古代社会の全体の意志の中で暮し、そこでの分業が互惠や再分配によって統合されていた時には、財貨の有償的移転行為を専門に担って暮しが成り立つ余地は少ないし、自己の計算によって営利を追求する企業が存立する基盤も十分ではない。

フェニキア人の生きた時代は、商業というよりも、まだ交易という呼び方のほうがふさわしい時代であったと言えるかもしれない。あるいは交易が贈与交

易から管理交易に移って、われわれの社会の歴史がそれをさらに市場交易に移し替えていく、その下地を用意していた時代だといっていかもしれない。

歴史には繰り返される部分と繰り返されない部分とがある。フェニキア人の商業活動は現代の商業活動と重なるほど似かよっている部分がある。しかしそれは現在とは違った条件の下で行われていたことを思い起さねばならない。特にそれは、市場システムのなかった時代、あるいは市場を用意するための下地がつくられていた時代のものであったということを考えに入れなければならないだろう。

### 3. 文明の接点

フェニキア人はセム系の血を引いて、顔は細面で、鼻は鷲鼻、物腰はオリエンツ風で、しかも雄弁であった。<sup>[3]</sup>そしてなによりも彼等は勝れた商業民族、あるいは航海民族として知られている。この二つの民族的特質が相互に関連し合い、相乗効果を生みながら、この寡黙な民族の名を世界史に永久に留めることになった。フェニキア人の持つこの二つの民族的特徴を明らかにするためには、どうしてもこの民族の誕生から語り始めなければならない。

さて結論から言っておこう。フェニキア人は、少なくとも三つの民族の融合の傑作であったといってい。ゲバル人(die Gibräiten)と呼ばれた原住民に、セム系のアムル人(die Amurriter)あるいはアモリ人(die Amoriter), そしてインド・ゲルマン語族に属する「海の民族」(die Seevölker)の二つの民族がそれぞれ時代を置いて混入して出来上ったのだ。<sup>[4]</sup>

原フェニキア人(Proto-Phönizier)は、19世紀になって考古学者達の手によってその姿をあらわした。このカナアン(Kanaan)の原住民に、紀元前2300年と2100年の間にシナイ(Sinai)からやってきたアムル人が融合して、ここにアムル＝カナアン人、あるいはカナアン＝フェニキア人が生まれた。この時からカナアンの都市の交易民族の名が近隣諸国の文献に記録され始める。そして紀

元前1200年頃、北方から侵入し、混血した「海の民族」の血がスプリングボードになって、カナアンの交易民族はフェニキア人となって、商業民、航海者となって歴史の表舞台に大きく登場することになるのである。

紀元前4000年頃、この稿の主人公達の故国、レバノン海岸から東に1千数百kmのところ、彼等の民族的性格とその歴史的役割を決定する革命的事件が起り始めていた。ユウフラテス (Euphrates) とティグリス (Tigris) の河間、南メソポタミアで、オベイド人 (die Obeid-Leute) と名付けられた農耕民 (die Ackerbauern) が集落をつくったのが事件の発端となった。家々は葦と粘土でつくられていたが、その周囲は塁壁によって守られ、一つのまとまった空間を形づくっていた。この素朴な空間が古代都市の原型になるのである。

これから500年を経て、紀元前3500年頃に中央アジアからこのオベイドの地に流れ込んだシュメール人 (die Sumerer) が、この制度をベースにして都市国家をつくり上げた。この移住者によって建てられた都市国家は、都市部とその周辺の数マイルの地域から構成されていたが、その典型的な遺跡の一つがペルシャ湾 (Persischer Golf) に臨むウル (Ur) で発掘されたことはよく知られている。ユウフラテス河の左岸にあるこの大集落は、すでに大規模な都市計画によってつくられ、城壁をうがち、それに沿って運河が堀られ、その規模はほぼ800m、600mの楕円形であった。<sup>6)</sup> 城門を開けば、都市の機能は外の世界に及んだ。城外には耕地や果樹園が広がり、陸路や運河が周辺の村落や集落を結び、大河や隊商路が遠隔の地をつないだ。

ところで、数十万から数百万の人口を擁し、巨大な高層建築と立体的な交通システムを持つ現代の都市に住みなれた人間にとっては、古代都市は、都市というよりも都市の粗型としか映らないかもしれない。しかし初めてこのような制度が登場した時代にあっては、これはまさに「都市革命」であった。

さて、今一つの革命的現象がナイル (Nil) の河谷にも生じた。ナイルの定期的な氾濫は上流から肥沃な泥を運び、その河岸に沖積土の層を重ねてきた。この地に農耕と牧畜を始めた無数の村落が生まれた。その血縁集団がやがて地縁を含んだ部落となり、勢力を持った部落を中心に国と呼んでいような連合組織が芽生え始めた。この中から代表の権能が凝縮されていて、王が生まれ、小王国が連立していったが、紀元前3000年頃には、これらの王国を統一した古帝国が出来上っている。この古帝国の首都が、現在のカイロ (Kairo) の南20数 km 上流にあるメネフルーミル (Menefru-Mirê), 古代ギリシャ人によってメンフィス (Memphis) と呼ばれた。このエジプト最初の首都は、生者の都として、ギゼー (Gizeh), サッカラ (Sakkâra) などの死者の都を擁して、輝ける文明地帯の中心となった。

メソポタミアとナイルの二つの文明は、初めほとんど交流なしに成立したが、それらが大きく成長する過程で接触を始めた。その最大の接触点となったのが、フェニキア人の故国、レバノン山麓の細長い一帯なのである。二つの文明が異質であればある程、それを交流させる機能を持った交易の役割は大きかった。

#### 4. 交 易 民 族

人類は、ある場所で得られないものを遠方から獲得する方法をいくつか生み出した。例えば、狩猟、略奪、遠征である。これは一方的な、しかも強制的な財の移転行為である。これに対して交易は、双方的かつ平和的な財の獲得方法ということになる。しかしいずれも集団的な行為として始まった点は同じである。

交易は最初、贈与交易として始まっている。それは、交易が共同体間で互に贈物を交換し合うという儀礼的な習慣をベースにし、そこから発展したと考えられているからである。もちろんこの形態は、一方では共同体間だけの習慣に



とどまらず、その後に成立する古代社会、あるいは古代帝国間にもそのままの形で受け継がれていく。しかしまた一方では、贈与交易として始まった交易は、次第に人類が農耕や牧畜という革命的生産様式を採用して、数百万年に亘った狩猟採取の遊動的な生活から足を洗って、大地に定着した生活に入っていくにつれて、共同体の新陳代謝を積極的に促進する社会的機能に発展していくのである。大地への定着は、人々がその環境条件を自分達の生活に都合のいいように変えていく創造的適応行為の初りであったが、同時にこの定住社会の自律性と自己保存性を貫くために、機能的には外の世界に開いた系を構成し、このシステムの新陳代謝機能を促進する方法を開発していくプロセスの初りでもあったからである。

交易が行われるためには余剰生産物の存在が前提になるが、交易によって珍しい物を手に入れたという人間の欲望は、余剰生産物の増産に拍車をかける。余剰生産物の増加が交易を常習化させ、それによって、やがて互惠や再分配の原理によって統合されていた共同体内にわずかながら交換という分業の統合原理が入り込む。交換の原理が浸透すれば、それだけ交易によせられる期待は高くなる。こうなると交易は儀礼的な性格を失なって、共同体にとっては戦略的な性格を持つことになる。

紀元前1万年頃から数千年をかけて、農耕革命の実験を繰り返していた村落共同体にとって、交易が持った社会的意味は大きかった。それは、農耕や牧畜の技術開発にも、またそれを支える分業体制の進展にも大きな刺激を与えたと想像されるからである。そして農業革命の実験に成功し、さらに大規模な分業体制を組み込んだ都市革命を為し遂げた古代文明社会にとっても、交易はそれを活活化させるさらに重要な社会的機能であった。何故なら、文明の新陳代謝機能は、異質な文化、あるいは異質な文明との交流によって促進されるからである。

古代文明社会はすでに社会余剰として、その中から素朴ながら都市を抽出させている。その都市には、すでに支配者層と並んで市民階層が存在し、その市民の中に支配者層の需要に応じて、支配者層の意思を代理して交易を行う交易人が存在している。このような古代社会がいくつか成立し、それらを核にして異質な文明圏が広がり始めると、それらが互いに引き合う磁気を帯び始める。その磁場に位置して、引き合う磁気を利用しながら生計を立てる民族があらわれてくる。社会間の交易活動を仲介する交易民族の登場である。彼等はいずれも文明社会の周辺に位置し、交易以外に生計を立てる遺産もなければ環境もなかった弱少な民族であった。彼等にとって、交易はまさに生業であったのである。

そうした交易民族の一つが、現在のレバノン共和国のジュバイル (Jubeil)、かつてのビュブロス (Byblos) に住んでいたといわれるゲバル人 (die Gibilten) である。彼等もまた素朴ながら、この地で交易を担う一つの小さな民族として暮しを立て、交易の腕を磨いてきたに違いない。彼等は後のフェニキア人から見れば、原フェニキア人の一派だと言っていい人々である。

しかしこの程度の交易民族はどこにでもいて、格別に歴史に記録される程の功績を残した存在ではない。もしこの民族の身に大きな変化、つまり彼等を一呑みにしてしまうような民族の移動の波が押し寄せなければ、後にギリシャ人にポイニクス (Phoinikes) と呼ばれ、畏れられた商業民族は生まれなかったに違いない。ゲバル人に代表される原フェニキア人自体も恐らく混血の所産に違いない。何故ならここは、ナイルとメソポタミアを結ぶ主街道で、さまざまな民族が入り込み、混血し合う諸民族の坩堝であったからである。しかしこの原フェニキア人に、通常の民族の混合の度合をはるかに越えた多量の異民族の血が入り込む、一つの事件が起ったのである。その事件の糸を手繰っていくと、セム系の遊牧民族の移動が浮び上ってくる。

## 5. 砂漠の民族の移動

エジプトは砂漠の国である。この砂漠の民にとって、ナイルの恵みは計り知れない。エジプトにナイルが流れているというよりも、ナイルがエジプトをつくっているといった方が正確であるかもしれない。白ナイル (Weißer Nil), 青ナイル (Blauer Nil), アトバラ河 (Atbara) という三つの水脈を合わせ、六つのカタラクトを越えてアスワン (Aswân) に入ったナイルは、100km 以上の道程をゆっくりと地中海まで北流する。アスワンからカイロまで約880km, ナイル河谷から引かれた運河網に沿って 20km 幅の耕地が広がる。ここが上エジプト (Oberägypten) である。ナイルは、カイロを通過すると広大なデルタ地帯をつくり出す。ここが下エジプト (Unterägypten) である。南北に細長いこの二つのエジプトが、古代エジプト人の国であり、それは今日でも変わることなく続いている。今でもエジプト全国民の99%がナイルの河谷で暮らしを立てている。<sup>[6]</sup>

ナイル河谷の西にはリビア砂漠 (Libysche Wüste) が広がっている。古代エジプト人は、ここを自分達の生活や文化を脅かす盗賊の巣窟であると信じてきた。そしてナイルの東には、スエズ湾 (Golf von Suez) とアカバ湾 (Golf von 'Aqaba) に挟まれたシナイ半島 (Sinai-Halbinsel) が続いている。シナイは、豊饒な文明の成果に群がってナイルの国に侵入してくるアジア人の通路であった。古代エジプト人は、自国を防衛し、またシナイ半島の先端にある銅山や宝石坑を確保するために、シナイに軍事基地を置いてきた。しかしこの前哨基地は何度となく破られた。

エジプト人から見れば、これは豊かな楽園を荒らすアジア系異民族の侵入以外のなにものでもなかったが、これらの異民族にシナイの前哨基地を破らせ、彼等をナイルの河谷に迫らせるものは、乾燥地帯に繰り返して発生する砂漠の民の大移動のエネルギーであった。何回か繰り返された民族の大移動の中の一つ

が、フェニキア人の創造に大きな役割を演ずることになるのである。

エジプトに比較して、外敵の侵入という点では、メソポタミアは更に条件が悪かった。地中海東岸と共に肥沃な三日月地帯を構成するティグリス、ユーフラテス両河の流域に沿ったこの地帯は、海や砂漠や山地を控えているが、これらはいずれも自然の防壁とはならなかった。その周辺の草原や山地に住む遊牧民が、時には平和的な手段によって、時には武器を持ってこの地に入り込んだ。

メソポタミアは現在のイラク共和国に収められている。ティグリスとユーフラテスの両河は、現在その長い旅の終りで合流してペルシャ湾に注いでいる。その巨大な沖積作用が河口近くに無数の中洲を形成している。かつてここに華かな文明が開花した時代には、海岸線は現在よりも200km内陸に寄り、両河は別々にペルシャ湾に注いでいた。<sup>[7]</sup>

このメソポタミアの最南部、河口地域のバビロニア (Babylonia) の地に最古の王朝を立てたシュメール人も、もとをただせばティグリス・ユーフラテス両河の恩恵を最も受けたこの地に侵入した謎の民族であった。<sup>[8]</sup> しかしシュメールの首都として機能したウル (Ur) も、200年を経てその北辺を占めた別の民族にその役割を譲り渡しているのである。新たな侵入者達はサルゴン一世 (Sargon I.) に率いられたアッカド (Akkad) である。彼等はセム人の一種に属している。アッカド帝国は紀元前2300年、サルゴンの死とともに亡びるが、その後セム人達はメソポタミアの中流域につぎつぎと勢力を拡げていく。

メソポタミアの地に、時をおいて果てることもなく押し寄せ続けるセム人のエネルギーを供給したのは、やはり乾燥地帯に定期的に繰り返される民族の大移動であった。この運動の一つが、フェニキア人の民族的特質を決定する大きな事件につながるのである。

## 6. 海 の 遊 牧 民

乾燥地帯、ここは生命のバランスが際どいところで保たれている。一定の空間が養える部族の数も、一つのグループが率いる有蹄類の数も決められている。その限度を越えると、生命の再生産はむずかしい。牧草地も水源もたちどころに枯れてしまうからである。それにもかかわらず、砂漠の人口は増え続ける。そしてこの人口増加の圧力は一定地域の中から弱少な部族を弾き出すか、それでも足りない時には砂漠の民族の大移動を引き起す。砂漠の歴史の中ではこの現象は何度も繰り返された。オリエントを舞台に不断に繰り返された民族の移動の中で、われわれのテーマに直接関連するのがセム族の移動である。

セム族 (die Semiten)、これは言語学的には喉音と口蓋音に富む慣用語法を共有する諸民族の集合概念である。<sup>9)</sup> そして紀元前3500年以後、アラビアやシナイの砂漠からティグリス＝ユーフラテスとナイルの豊饒な文明に引かれて、何回となく大移動を繰り返した代表的な遊牧民族の総称でもある。いずれにしても彼等は、砂漠の人口が増加する度に、文明地帯に向って大移動するという運動律に支配されたのだった。

こうしたセム系民族の移動の中で、われわれのテーマに結びつく一つの事件が見い出される。それは紀元前2300年から2000年、約300年の歳月をかけて行われた。シナイからメソポタミアへ移動した遊牧民集団の移動である。

シュメールの最後の王朝を消し去り、やがてバビロンに王朝を築き上げ、ハムラビ法典で知られるハムラビ王 (Hammurabi) を生んだアムル人 (die Amurriter)、あるいはアモリ人 (die Amoriter) の移動である。彼等はこの時、メソポタミアに移動する通路として、シナイから北上してレバノン山脈に沿った街道を選んだ。この長い歳月と距離に亘った民族移動の中で、本隊を離脱した一団がレバノンの山麓に侵入し、原フェニキア人と混血し、レバノン・パレス

チナなどの東地中海岸に定住したのである。

こうして彼等はこの地で自らをカナアン人 (die Kanaanäer) と称するようになった。そう、ヨシュア (Josua) に率いられてイエリコ (Jericho) の都を陥し、旧約聖書の約束の地カナアンに入ったユダヤ人もまた自分達をカナアン人と呼んだ。後にギリシャ人からは、「紫の帝国からやって来た人々」 (die Leute aus dem Purpurreich) といわれ、自らはカナアン人と称したフェニキア=カナアン人と、ユダヤ=カナアン人は民族としては兄弟であると言えるかもしれない。何故なら、後者は前者よりも1000年後になるが、両者共にシナイを出て同じ道を北上して、この東地中海岸に入ったセム系の民族だからである。

こうして二つの異なった文明圏の接点に生きてきた原住民に、セム系のベドウィン人 (die Beduinen) が波のように押し寄せた。レバノン山麓はもともと諸民族の坩堝である。民族の混合ははるかな昔から現在まで休みなく続けられている。しかしこの紀元前2300年から2100年の間に起った激しい、通常の民族の交わりを上まわる混合の中に、新しい民族が出来上る大きな可能性があった。その可能性の中から登場したのがカナアン=フェニキア人である。

砂漠の遊牧民が、2300mの雪を戴く山脈と青い海面を持った地中海との間に生きることになった。原フェニキア人の暮らしの仕方を受け継いだのだった。

山脈の険しい斜面には、樅や糸杉と並んでレバノン杉が茂っている。<sup>44</sup> この住民達ははるかな昔からこのレバノン杉を切り出し、この輸出で生計を立ててきた。地中海に沿って走る山脈に生育し、高さ40m、太さ4mにもなるといふ、この巨大な針葉樹は、森林の少ない近東の人々にとっては貴重であった。中でも、これを最も欲しがったのがエジプト人である。ナイルのほとりは水源は豊かだが、そこでは角材を切り出せるような木材は生育しない。彼等にとって、レバノン杉はかけがえのない建築材料であった。それと同時に、これはエ

ジプト人にとっては聖なる木でもあった。何故なら、レバノン杉からは淡褐色の芳香のあるセダー油 (Zedernöl) が採れたからである。この油が布に浸され、歴代のエジプトの王家の人々の遺体を包んできたからである。

したがってレバノン住民達と古帝国成立以前よりレバノン杉を求めてきたエジプトとの間に通商があった。この生業を、この地に入った流沙の遊牧民達は受け継いだのだった。彼等はこうしてすぐれた交易人となり、組織者となった。しかしこの程度の交易民族はどこにもいたし、取り立てて商業民族と呼ぶほどのこともない。しかし彼等を交易民族から飛躍させる決定的な事件が待ち受けているのである。その事件を切っ掛けにして、彼等は交易民族からやがて商業民族へ、そして航海民族と呼ばれるまでに変身していくのである。

カナアン=フェニキア人達は、重量があつて嵩のある杉材の運搬には海路が便利であることを知ったし、同時にレバノン杉から船を造る技術も習得した。そしてこの地に根を下して海のベドウィンとなる決心をしたカナアン人にとって、海は彼等の生活舞台になった。しかし彼等の航海技術と造船技術はせいぜい沿岸航海の域を出なかつたであらう。ところがその彼等がやがて伝説にまであつた勝れた航海者となつて、海洋に乗り出すことになるのである。この飛躍はどうして生じたのか。これはフェニキア人を巡る数々の謎と共にさまざまな人々の興味を引いてきた。これまで、海洋航海に必要な航海術と造船技術と、そしてそれらを磨き上げる冒険精神は彼等自身が発展させたのだという考え方が広くとられてきた。しかしこの稿では、平底の箱舟で東地中海の沿岸をうろうろしていた彼等が、竜骨船 (das Kielschiff) を駆って、レバノンから地中海を巡って、西はイベリア半島 (Iberische Halbinsel) まで、そして南は紅海 (Rotes Meer) を通つてアフリカの東海岸へ乗り出す航海者となるには、彼等の身に彼等の運命を変えるほどの大きな事件が起らねばならなかつたという仮説に従つてみたいのである。<sup>11)</sup>

そうすれば、カナアン人が海洋の航海者として大いなる変身を遂げた紀元前1200年頃に近東の国々に起った事件が大きな意味を持ってくる。それは「海の民族」(die Seevölker)の侵入である。

## 7. 海の民族の侵入

古代オリエントにおける文明地帯とその周辺地域という構図に変化が訪れ始めた。紀元前1600年頃、文明の落差の中で長い間互いに利益を分け合ってきたエジプトとレバノンとの間の密接な関係に、変化の兆しが現われ始めたのである。その変化をつくり出した主要な原因を探っていくと、再びアジアにおける民族の大移動にぶつかる。

この時期までほとんど動きの知られていなかったインド・ゲルマン語族(die Indogermanen)の移動である。彼等の足跡は西ヨーロッパと南ロシアの中間地帯まで辿ることはできる。しかしその発祥地は知られていない。この民族集団の移動の一つが紀元前2000年の中頃に起り、その余波がエジプトにも及んだ。馬で引く戦車、強弓を引くアジアの混成民族として知られるヒュクソス(die Hyksos)の出現である。彼等はシナイ半島を横断して、エジプト中王国に侵入し、160年間下エジプトを占拠した。

しかしやがてヒュクソスを追い払った紀元前1570年から、400年に亘るエジプト新王国の時代が始まる。古代エジプトの最盛時である。エジプト軍は西アジアまで進攻し、北シリアからユウフラテス河畔まで進軍し、この時代オリエント最強の国家となる。この時レバノンはエジプトの属州になり、ビュブロスエジプトの国港になる。

しかし西アジアの情勢は刻々と変わった。再びインド・ゲルマン語族に属するヒッタイト(die Hethiter)がアナトリア(Anatolien)からレバノン山脈に沿って南下を始めたからである。エジプトとヒッタイトとの間に闘いが繰り返された。エジプトの同盟国レバノンは、ヒッタイト人の勢力下におかれるが、



エジプトとヒッタイトとの間に和平条約が機能し始めると、この時からカナアンは長い間続いたエジプトとの関係を断ち切っていくのである。それを決定的にしたのは、第3回目のインド・ゲルマン語族の侵攻であった。

前12世紀（エジプト第20王朝後半）に3度目の異民族の侵攻が始まった。今度は彼等は海からやってきた。東地中海全域に亘って彼等の船隊にかなうものはなかった。彼等はこの時代のどの民族にもまして、海に長じた民族であったからである。この海に長じた諸民族の混成軍を、エジプト人は「海からやってきた民族」(die Völker aus den Ländern des Meeres)と呼んだ。今日そのグループの動きは、この時に処々に起きた「海の民族の大移動」(die Seevölkerbewegung)の一つとして理解されている。

エジプトは「海の民族」の来襲から再び立ち上るのだが、3度目のインド・ゲルマン語族の侵寇を受けた時には、すでに昔日のオリエント最大の世界帝国の面影はない。それに応じてこの文明の周辺諸民族は次第に自立を始めるのである。

エジプトが「海の民族」の侵攻を受けていた時に、そのグループの残片がやはりレバノンの海岸に迫っていた。チュケル人(die Tjeker)である。しかし彼等の侵攻はエジプトに対するのとは違った作用の仕方をした。その侵掠はカナアンの地をフェニキアの地に変え、やがてフェニキア人の活動舞台を地中海全域に拡げ、彼等を歴史の表舞台に送り出す強力なスプリング・ボードになるのである。

海上では恐るべき力を発揮した「海の混成軍」も、ナイルの河口や支流に入ったら陸軍の敵ではなかった。エジプト軍によって敗れ去ったのである。しかしその残党がシリア・レバノンの海岸で猛威をふるい、やがてここの民族に融合した。こうして彼等はシナイからやってきた遊牧民の末裔に、やがて海洋の民族として生きるすべての資質と技術とをもたらしたのだった。レバノンの原

住民とシナイの遊牧民との結合の中から交易民族カナアン人が生まれ、そのカナアン人に「海の民族」が融合して航海商業民族フェニキア人が生まれたのである。

カナアン＝フェニキア人達も東地中海の沿岸に生きた民族として海に接し、海に暮らす知恵と技術とを磨いてきた。この海に慣れた民族に、移住してきた「海の民族」は、龍骨船と漕船技術をもたらしただった。<sup>122</sup> どんなにか小さな船ではあったが、長いこと平底船しか知らなかった人々にとって、船底にキール(der Kiel)を持った龍骨船はまさに革命的な機能の出現であった。

龍骨船は平底船よりも風浪に強く、舵がきいた。この時代そう簡単に海洋に船を乗り出すことはなかったけれども、原理的には十分海洋航海に耐えられる船であった。

この時代の船の動力は風力と人力であったが、「海の民族」はカナアン＝フェニキア人に、この人力を効果的に使う技術も教えたに違いない。船を漕ぐ時にオールを使うという点に変わりはないが、オールの漕ぎ手の向きが反対に変わったのである。船首に顔を向けて櫂を漕ぐ従来のやり方よりも、漕ぎ手は船尾に顔を向けてオールを操るほうがずっと効果的であることがわかったからである。

このような「海の民族」の侵入後入ってきた技術と経験とを積み上げて、フェニキア人が使い始めた船として一般に知られているのは、戦艦(die Kriegsgaleere)、商船(das Handelsschiff)、そして貝殻ボート(das Muschelboot)である。<sup>123</sup>

戦艦は二列に並んだ漕ぎ手と小さな帆によって操られる細身のガレー船である。船首に衝角をつけ、船尾を反らせ、舷側には戦士の楯が掛けられた。戦艦に比べて漕ぎ手の数は少なかったが、商船は積荷を増すために、大きな船倉と広い船幅を持ち、重い船足を四角の大きな横帆でカバーした。貝殻ボートはある時には船隊補助艦として、海賊船として、また時には武装商船として使われ

た。大抵の場合には帆を持たず、人力によって駆動した。

いずれもフェニキアの船は今日の船の概念でいえば、まったくの小舟であるけれども、それを操る航海術とそれを造る造船技術と共に、当時の地中海を制するに足る画期的な機能の出現であった。

## 8. 新しい通商の舞台

フェニキアといっても一つの統一国家が存在したわけではない。レバノンの海岸沿いにできた諸都市の総称であって、近隣の諸民族からは、フェニキア人達はゲバル人 (die Gibliten), シドン人 (die Sidonier), あるいはテュロス人 (die Tyrer) というふうにいずれも都市の名で呼ばれた。

ゲバル人の都市ビュブ罗斯は、ナイルからメソポタミア北部に通じる街道の終点として、そして背後のレバノン山麓から切り出される木材の積み出し港として古くから盛えた。この木材の積み出し港は、レバノン杉を聖なる木として珍重したエジプト人にとって特別な地であった。だから新王国時代にはエジプトの国港とさえなった。しかしこの都市はエジプト人にとってだけ重要であったわけではない。ビュブ罗斯はレバノン杉の対価としてエジプトから運ばれてくるパピルス (der Papyrus) の主要な交易港であった。下エジプト人に生命の復活の象徴とされた、生命力の強い、学名キュブルス・パピルス (Cyprus papyrus) はアフリカ産の葦である。この葦からエジプト人は紙をつくった。エジプト人の天才的な発明の一つである。記録を残す材料として早くから石板や粘土板が使われたが、保管の問題を考えれば、紙のほうがはるかに勝れた素材である。パピルスは官僚組織を持った古代国家から大いに需要された。ビュブ罗斯はその巨大な需要を持ったパピルスのオリエント最大の積み換え港であったのである。

ビュブ罗斯は、ギリシャ人にとってパピルスを連想させる都市であった。<sup>64</sup> パピルスの原産地はエジプトであったが、それはいつもビュブ罗斯を経由して

やって来たからである。ビュブロスから、シリアあるいはキプロス島 (Zypern) を経由してアナトリアへ、そしてペロポネソス (Peloponnisos) へとやって来た。ビュブロスは古代ギリシャ人にとっていつも紙 (das Papier) を思い起させた。

しかし、レバノン海岸に海洋航海術が植え付けられると、東地中海の沿岸ルートは少しずつ重要性を失ない、ビュブロスに代って、シドン、テュロスという若い二つのフェニキア都市が抬頭し始めた。これから後、ゲバル人と呼ばれる方に代って、テュロス人あるいはシドン人という名がフェニキアを代表して、聖書やホメロスの詩の中に登場するのである。それは、長い間エジプトのパートナーであったカナアン人がエジプトとの通商の規模を小さくして、未知の世界へ向って、広く通商相手を求め、フェニキア人に変身していく時代の訪れであった。ビュブロスの南に位置するシドンとテュロスは、ギリシャ、イタリア、スペインに向う地中海西ルートの主要な基地になっていくのである。それは、長い間沿岸航路に閉じ込められていた交易民族が、商業民族となって古代世界を押し拡げていく巨大な変化の始まりであった。

紀元前1200年以後、つまり「海の民族」の侵入以来、フェニキア諸都市の主要な顧客はエジプトではなくなった。地中海全域が彼等の新しい商圈になったのである。

古代の交易は略奪や海賊行為と三位一体を成していて、交易者は相手次第では盗賊や海賊にも変わり得た。フェニキア人達の取引もまた、時には無慈悲に、そしてかなり強引に行われもしたことだろう。しかし人々の暮しが奪い合いで成り立つものではないし、略奪や海賊行為で数世紀に亘って一つの民族が盛えられるものではない。弱少な民族が生き抜いていくためには、一時的な利益のために搾取行為をして、相手を敵対者にしてはならなかった。手間はかかっても、協力者にしていかなければならなかったはずである。フェニキア人は、きわどいけれども、それが積み重なっていけば限りない富を生む相互の信頼関係

の上に国家を成立させていく道を選択したのだった。

レバノンの人々が築き上げた信頼関係の中で、実際次のような品々が物々交換の対価として地中海世界を往き来した。もちろんこれが全てではなかっただろうが、この時代の交易を想像する上で貴重な手掛りとなる。<sup>44</sup>

- ① 香油（ユダ・イスラエル・イエーメン）、苧蒲油（アナトリア）、蜂蜜（ユダ・イスラエル）、肉桂（アナトリア）
- ② 染料（シリア）、紫（シリア）、亜麻織物（シリア・エジプト）、絨毯（イラク・ペルシャ）
- ③ 宝石（シリア・イエーメン）、珊瑚・ルビー（いずれもシリア）、金（イエーメン）、銀（アナトリア）、象牙・黒檀（いずれもアフリカ・インド）、鞍敷（アラビア）、青銅器（アナトリア）
- ④ 鉄・錫・鉛（いずれもアナトリア）
- ⑤ 馬・軍馬・騾馬（いずれもアルメニア）
- ⑥ 小麦・家畜・食料品（いずれもレバノン近隣）、奴隷（アナトリア）

こうした対価の中で家畜や食料は別として、高価な品々が再び商品として別の需要地へと向ったのだった。世界には風土の違いが生み出す異国の産物が散在して、人間が珍しいもの、高価なものに対して精神を輝かせる以上、これらの品々が落ち着く先を求めて対流現象を引き起す可能性を持っている。フェニキア人は、地中海を舞台にして、この対流現象を利用し、これを組織的に経営したのだった。航海者と交易者が一体となって、時には略奪や海賊行為を伴いながら、広域、遠隔の物産の仲介取引に入っていた。

## 9. 交易民族から商業民族へ

現在われわれの生活は、大部分市場システムという一つの分業統合系によって具現されている。市場システムの下では、さまざまな領域に亘る人間の生活が一まず需要群と供給群とに選り分けられる。そしてこの選り分けられたもの

が市場における交換の原理に基づいて再び統合される。交換の原理によって需要と供給との間に財やサービスの占有上の移転が生ずるのである。この移転は交換レートによって行われる。交換レートに基づく移転を円滑にするために貨幣という交換手段が使われている。この簡単な市場の原理によって、さまざまな人間と人間の生活を含んで成り立つ複雑な社会の分業が統合されているのである。もちろん市場システムは、一つの社会の中だけではなく、社会間にも、そして全世界にも及んでいる。

しかし主として農耕や牧畜で人々の暮らしが成り立った古代社会や部族社会では、人々はまだ家族や親族、あるいは共同体の絆の中で暮している。まだ複合化された産業を持たない、したがって個人が集団から分解されていない社会では、分業は互惠や再分配によって統合されている。確かに社会間には交換行為が行われ、それが社会内にも浸透を始めようとしている。しかしそれはまだ、一つの社会の分業の統合原理になるまでには至っていない。

フェニキア人の生きた時代にはすでに棒状や輪状の金属貨幣が現われている。これは秤量貨幣として債務の決済や代金の支払手段となっている。そしてまた、会計計算上の標準としても使われるようになっていく。しかし貨幣が鑄造貨幣となって、間接的な交換手段として機能するまでにはもう少し時代を降らなければならぬ。交易は交換の間接的手段なしに、物々交換の原理によって一つの事象として処理されたのである。

しかしこの時代、既に交易に対する社会的な欲求は高まり、それはいくつかの仲継地を通して、さまざまな民族の手を経由して行われていたのである。この遠距離、広域に亘る仲介取引を物々交換によって管理することは特別な民族的才能を必要とする。いや才能だけでは十分でないかもしれない。民族の盛衰を交易活動に賭ける覚悟を用意させるだけの運命を持たねばならなかったかもしれない。

「海の民族」の混入後つくられたフェニキアの各都市は、陸上から出来る限

り海岸によって、岩礁の上や険しい崖ぶちを足掛りにしてつくり上げられた人口の交易港であった。レバノン山麓の弱少な民族が強大な陸上勢力から安全を保ち、民族を栄えさせる唯一の方法として、彼等は陸に背を向けて、海に立ち向う決心をしたのである。海に突き出たフェニキアの海上都市は、強権支配の及ばぬ中立地帯となった。ここでは各地からやって来る交易者達の権利や利益が保護された。さまざまな船舶の寄港地、停泊地となり、ここで陸揚げされた荷は、保管され、格付けされ、再梱包され、再び船に積まれていく。レバノンの海上都市は、物々交換時代になくはならない管理交易の制度そのものであったに違いない。<sup>94</sup>

フェニキア人は他の陸上国家と違って、巨大な神殿や軍隊をより少く持つことを決心した。民族生存の基礎を交易において、この機能を優先させるために他の社会的機能を犠牲にした民族であった。レバノンの諸都市は交易の制度と化し、交易を発展させ、それによって民族が生き残るという一点に向けて国家を建設する道を選んだのだった。これは国家存続の多角的戦略という点からみればこの上なく危険な賭けであったが、それだけに一つの目標を実現する上でこれ以上効率のいいやり方は他になかったであろう。いや他の機能を小さくして、交易の機能をより大きくする以外にこの国家が生きのびる道は他になかったのだといった方がいいだろうか。

いずれにしてもフェニキアの海上帝国の成立と共に、地中海世界にはフェニキアの植民地や仲継基地がつくられ、それらを結び合わせると、壮大な交易網が広がった。その交易網の広がりの中で、略奪や海賊行為に代って、物々交換を原理とした分業世界創造の実験が行われた。ここでは交換という有償的移転行為の可能性と、その行為を媒介にして成り立つ企業の機会が広がっていったに違いない。そして需給の調整機能を担うことによって得られる利益の機会も保証されていったことだろう。商業の可能性が開かれつつあったのである。

このような時代背景の中で、人々は、民族の才能と努力を総動員したような

営利活動を展開し、民族の命運をその一点に賭けたような企業活動を組織したフェニキア人の姿を思い浮べるのであった。それは、この時代の他の無数の民族の交易活動とは明らかに違っていた。人々は、フェニキアを広くは交易民族と理解しながらも、時にはその交易からすでに進化した要素を取り上げ、彼等を商業民族と呼び、彼等の担った事業を仲介商業、あるいは仲介貿易と名付ける習慣を持ってきたのである。

## 10. フェニキア商業の秘密

さてこれから先は、われわれもフェニキア人を商業民族、そして彼等の担当したものを商業と呼んで話を進めることにしよう。

それにしても、地中海商業のライバルであったギリシャ人を魅了し続けたフェニキア商業の秘密は何であったのだろうか。その秘密を解く鍵は、フェニキアの仲介商業だけではなく、仲介商業に連動した自国産業の育成にもあったのだということが知られている。<sup>40</sup> 自国産業を活力にして、フェニキアの商業機能はさらに増幅されたのである。

文化はある人間の集団を一つの単位として束ねるためにうみ出されてきた装置や工夫やその積み重ねであって、これによって、例えば一つの民族が他の民族から区別される性質のものであるから、文化を交流させるということは本来、大規模な遠征や戦争でもって地均しをしない限りむずかしい。しかしある民族が生み出した産物は、それがその民族の持つ勝れた文化のかおりを漂わすものであればあるほど、他の民族がそれに憧れを抱く可能性は大きい。一つの産物がさまざまな民族の間に流通するようになれば、それはもう産物から国際的な商品になるのである。紫とガラス、この二つがレバノン山麓の住民達が世に送り出した国際的商品であった。

紫といわれる染料は、もちろん今日化学的に合成することができる。かつて日本では、紫草の根からこれを採った。テュロス人とシドン人は眼の前に広が



る地中海からのその原料を見出した。それは、ブルブリデ科 (die Familie der Purpuridae) に属する小さな巻貝である。一つの巻貝の分泌腺から採れる紫染料はほんの微量であって、一枚の布を染め上げるには無数の巻貝が必要とされる。それだけに、無数の巻貝を使って、わずかに染め上げられる紫の布ぎれは当然高価になった。今日の化学染料から比べればはるかに染め上りは悪かったが、フェニキアの紫染料は現在とは比べものにならないほど貴重品であって、これによって染め上げられたテュロスとシドンの紫の布は、高級品として当時の富裕な人々を魅惑したに違いない。

この染色方法はフェニキア人の独創ではない。はるかな昔からシリアのウガリト (Ugarit) の住民によって使われてきた。しかしフェニキア人の手によって、紫染色は国際的な性格を帯びて、フェニキアの重要な産業の一つになったのである。

ガラス、正確に言えばさまざまな造形を持ったガラス製の器だが、この製造方法は紀元前4000年頃に既にエジプト人によって知られていた。まだ不透明ではあったが、硬質ながら脆いガラスの容器は、その製造の秘密を知らなかった当時の人々から珍重され、高級品としてナイル河を下った。

それからどれ位の年月がたったのかわからない。フェニキア人がその製造過程を知ったのである。そして更に工夫が重ねられ、透明度が加えられた。その魅力は当時普及していた金属や陶器製のグラスを凌ぎ、フェニキアのグラスとしてテュロスやシドンの港から船積みされた。贅沢品であったが、フェニキアの販売網に乗ったガラス製品は、大量生産品となった。

一定の商品をあるところで買い集め、これを他の処で売り捌く仲介商業が組織的に経営されればその利益は大きい。風土の違いや文明の落差が生み出す潜在的な商品価値は、需給の間の隔離が巧みに除去されることによって顕在化し、

その価値を更に増すからである。実際彼等はそれを行った。数量を調整し、多少の加工を加え、時機を見図らった。しかし魅力的な自国産の商品が開発できれば、取引はさらに合理性を増す。需要に応じて供給量を調整できる。時間的、空間的な調整の計画が立ちやすい。自国の産業は多くの人々に生活を保証し、勝れた産業はフェニキアの名を高める。テュロスとシドンの製造工業が生んだ高級品、紫と、大量製品、ガラスはフェニキアの商業網に乗って地中海全域に広がった。それらは同時にフェニキアのネットワークを強化し、その浸透力を深める役割を果たしたに違いない。

フェニキア人は己が民族の生業についても寡黙であった。彼等についてわかっていることはいずれも他の民族の書き留めた記録によるものばかりだが、フェニキアの産業の一端をうかがい知る手掛りを提供するのが旧約聖書である。記録は断片的で、しかも各所に渡っている。フェニキア研究者達はこれを総合し、それに解釈を加えた。<sup>44</sup>

聖書の中にパレスチナに生まれたイスラエルという新生国家の建設に協力した民族としてテュロス人が登場する。時代は、イスラエルの王位で言えばダヴィデ (David) とその子ソロモン (Salomon) の時代、テュロスの年代紀で言えばヒラム (Hiram) が王位にあった時代である。紀元前10世紀頃、エルサレム (Jerusalem) の町に巨大な神殿が建設された。建築主はダヴィデとその子ソロモンである。そしてこの建築の請負主はテュロス王ヒラムである。

神殿建設のためにレバノンの山では木材と石材が切り出された。神殿建築の設計と施工と細かな細工を引き受けたのはテュロス人だが、恐らく彼等だけでは手におえなかったことだろう。シドン人やゲバル人を含めたフェニキアの知恵と労働力が総動員されたに違いない。これに対してソロモン王から1建設年毎に2万 Kor (約7000トン) の小麦と、2万 Bat (約70万リットル) のオリーブ油の代価が支払われたと言われる。<sup>45</sup> もちろんフェニキア人の指揮下でパレ

スチナの人々も働いた。3万人の木こり、7万人の運搬者、8万人の石工達が参加した。<sup>24)</sup>

フェニキア人はこのような規模を持つ神殿をソフトとハードを組合わせた巨大なシステム製品として輸出出来る能力を持っていたことが聖書の記録によって知られている。神殿だけではなく、彼等は宮殿を製造し、輸出するのだが、母国にはほとんどそれらを残さなかった。いやフェニキアの都市にはそれを残す十分な空間もなかったし、第一その気もなかったに違いない。そのためか、後世は彼等の文化的才能の評価に対しては厳しい。フェニキア人は商才には長けていたが、文化的な遺産を創造する能力を持たなかったと酷評されてきたのである。勝れた文化建造物をつくる能力を持っていた、それをことごとく商品として売りに出してしまうような民族に対して、歴史の評価はもともと公平でないのかもしれない。

## 11. 海上商業網とアルファベット

フェニキアの黄金時代は紀元前9世紀である。海上の商業網には大量の商品が流通し、その支配圏からは巨大な富がレバノン海岸のフェニキアの諸都市の金庫に流れ込んだ。フェニキア諸都市が最も盛えた時代である。そしてフェニキアの船隊が世界の果てを遠くまで押し広げたのもこの時期である。<sup>25)</sup>

フェニキア人を250万km<sup>2</sup>に及ぶ未知の海に乗り出させた原動力は、さまざまな要素によって組合わされていたに違いない。冒険心、好奇心、競争心……。しかしそれらを結集させ、目的の実現に向けて持続させる力を持ったのは経済的な動機であったに違いない。何故なら、長い未知の航海を組織するには資金がかかり、かかった資金に十分見合うだけの利益は取り戻されねばならなかったからである。

彼等は地中海世界でまず銅や錫、あるいは金や銀を探した。東地中海に浮かぶキプロス島(Zipern)は銅の産地である。彼等はここに五つの鉱山都市と金

属積出港をつくり上げた。イベリア半島のスペインでは、すでにこの原住民によって開発されていたシェラ・モレナ (Siera Morena) の銀山に行きついた。それに続いて、レバノン海岸から4000km近く離れたジブラルタル海峡を越えて、ガディル (Gadir)、今のスペインのカディス (Cádiz) に達して、ここに植民市を建設するのである。

一連の拡張運動が終了した後で、探險船路によってつけられたおぼろな航路が強化され、補強されていった。この時代の船による航海では、夜は陸に上って休息しなければならない。数日行程毎に補給基地や避難港がつけられた。マルタ島 (Malta)、ゴゾー島 (Gozo)、シシリー島 (Sizilien)、サルディニア島 (Sardinien)、イビーザ島 (Ibiza) に植民地が建設され、これらを結節点にして、ギリシャの勢力下を除く地中海全域にフェニキアの壮大な航路網が出来上った。この航路網は体系的に構成されていたが、各仲継地それ自体がこの時代の物々交換を原理とした交易のための制度そのものであった。

この海上帝国は、彼等にとってはいかなる神殿や宮殿よりも文化的な創造物であったに違いない。しかしこの文化遺産はもともと人間の視野を越えた存在であったが、フェニキア人が歴史の舞台から退場すると同時にほとんど消滅してしまった。わずかに名残りを留めるのは、後世の考古学的発掘によってあらわれたフェニキアの遺跡と、彼等の通商網に乗って運ばれた商品の残片だけである。いや今一つこの海上帝国が経営した商業網によって運ばれたものがフェニキアの遺産として残っている。それはアルファベットである。

古代フェニキア人がアルファベットの改良者、伝播者であったことはよく知られている。アルファベットの起源がどこまで溯れるかはわからない。それは新たな考古学的発見に左右されるからである。しかし今までのところ、シナイ半島のサラービト・エル・ハデム (Sarabit el Khadem) の古いエジプトの鉤

業中心地から出土した石板のシナイ文字が、実用化されたアルファベットの最古の見本であるという点では意見が一致している。<sup>24</sup> この見本から読みとれる文字から、恐らくこの文字を刻んだ人々は紀元前1500年頃のカナアン人、つまりエジプトとの取引のためにシナイに在留したカナアン＝フェニキア人であろうということも想像されている。

仮にこの推測が間違っているとしても、カナアン人がアルファベットの改良者であることは間違いのない。紀元前1500年以前使われていたと想像される30の字母を持つ楔形文字のアルファベットが、カナアンの地、北シリアのウガリト(Ugarit)、現在のラス・シャムラ(Ras Schamra)で発見され、しかも前12世紀頃にはカナアン人が22文字からなるフェニキアのアルファベットを使っていたことが確められているからである。

フェニキア人がアルファベットの発明者であったかどうかは別にして、彼等がその改良者、伝播者であったことは、このカナアン人が交易民族であったことと関係があるように思われる。エジプトとメソポタミアという二つの巨大な文明の最大の接触地帯に位置した一つの小さな民族にとって、その生存の道は、狭く、細長いレバノン山麓での菜園経営と、ここに通ずる陸路と海路を使った交易経営であった。異質な文明地帯の間で営まれる交易経営にあたって、それぞれ体系の違う象形文字と楔形文字の中から、交易用の速記形式の文字が開発される必要があったであろうことは十分に考えられていい。散発的な交易とは違って、組織的に交易が営まれるとすれば、どのような形であれ、簿記が記帳され、商用文が書かれねばならないはずだからである。それらが残されていないとしても何の不思議もないかもしれない。簿記や商用文は石板や粘土板に刻まれなかっただけなのだ。

商用語は簡潔であると同時に一般的でなければならなかったはずである。フェニキア文字が使いやすく、しかもそれが広くいきわたっていったことは、フェニキア人が商業民族であったことと無縁ではない。

フェニキア文字はまずギリシャ人が、次にローマ人が、そして最後にヨーロッパの全民族がこれを受け継いだ。ヨーロッパだけではなく、ロシア文字、アラビア文字、モンゴル文字、インド文字、そしてその後の世界の大部分の民族が使う文字の由来が、このフェニキア文字か、あるいはその原型に帰せられると言われている。<sup>23</sup>

## 12. 精神革命と商業

それでは、フェニキア人がアルファベットの改良者として、あるいはその伝播者として後世に光り輝いているのはどうしてだろうか。アルファベットとは別の文字体系を持った人々にとって、アルファベットという単純な音標文字体系が文字の歴史と人間の精神史に果たした役割について理解するのは多少むずかしいところがあるかもしれない。

フェニキア人以前にだって立派な文字はあった。例えば古代エジプトの象形文字 (die Hieroglyphenschrift), メソポタミアの楔形文字 (die Keilschrift), あるいはギリシャのミノア・ミケナイ文明の線形文字B (die Linear B-Schrift) である。しかしこれらはいずれも複雑で、人間が記録する道具としては扱いづらかった。<sup>24</sup> したがってこの時代の社会は、後世に記録を伝えるために、これを専門とする書記階級を分化させ、彼等に文字の扱いを委ねたのである。ところが、アルファベットの普及はこの文字の専門家達の飯の種を奪ったのである。

フェニキアのアルファベットは、まずギリシャに受け継がれた。どのような経過を辿ったのかよくわからない。しかし受け継がれたことだけは間違いない。というのは、ギリシャ人達はこの新しい単純な文字体系の素晴らしさを認め、これを自分達のギリシャ文字に仕上げた後も、「phoinikia grammata」、フェニキアの記号という別名で呼び、その恩恵を長く忘れようとしなかったからである。

アルファベットが伝わってから、ギリシャでは文芸の時代が開く。偉大な

叙事詩がいくつも書かれ、読まれるようになった。アルファベットの普及は、平均的な頭脳を持った人々を直接文化に関与させていく時代を創り出したのである。もしフェニキア文字という単純な音標文字組織がなかったとすれば、後の平均人の識字率の向上ははるかに遅れ、人類の「精神革命」の進展もずっと後になったことだろう。

「農業革命」、「都市革命」といった、それぞれ技術的、社会的革命を経た人類が次に体験するものは、「精神革命」といいでいだろうか。

人類史はまた、精神史という一つの視座から眺めることができる。人間の精神は世界の広がりとともに変化をしていく。一つの集団の成員として生きてきた人間は、それよりも大きな世界の存在を識ることによって、その広い統一世界から個とそれが属する社会の位置を自覚することになるからである。そして人の住む世界、そこからの視野が広がる度に、個人は日常的な体験の世界を超えた普遍的な世界を志向していくことになるからである。

人間以前の社会から人間社会が形成されて、人類が狩猟人として生きた数百万年の間にも、集団における個人の役割や位置について徐々に変化はあったに違いない。しかし狩猟採取時代といわれる遊動的な生活では、呪術的な世界が生きづいていて、個人は集団の中に埋没し、集団と化して生きていたに違いない。その後人類が農耕・牧畜という技術的な革命の進展を通して、社会の共同化を進め、大地に定着した生活を始めるが、これは人間の精神に大きな変化を及ぼしたに違いない。人々は農耕や牧畜にまつわる神話の世界の中で生きることになったのである。しかしこの社会でも個人はまだ集団から分解されていない。

ところが数千年に亘る農耕・牧畜型社会の中で生きてきた人々が、その神話的世界から解き放たれ、あるいはまた数百万年に及ぶ狩猟採取時代の遺産として受け継いできた呪術的世界から解放され、人々がより広い世界の存在を識り、

その世界から集団に占める個の位置に目覚めていく大きな精神の変化が、前8世紀から前3世紀の間にギリシャ、イスラエル、インド、中国に始まるのである。この稿の主人公、フェニキア人に最も深く関連したところはいうまでもなくギリシャである。

この人類の「精神革命」を引き起した条件はいくつか考えられるが、<sup>44</sup> アルファベットという単純な音標文字組織の定着もまた個人の確立によって特徴づけられる「ポリス社会」創造の大きな下地になったに違いない。誰にでも分かる文字がなければ、民族精神を養うことも、個人を自立させることもできなかったはずだからである。そして一つの大きな「精神革命」をしていくギリシャ人は、フェニキア人と地中海世界を2分し、やがてそれを凌いでヘレニズム世界を押し拡げていく。その広がりとともに、伝統や習慣の世界の中で暮らしてきた人々がまた、より普遍的な世界の存在を識っていくことになるのだ。

交易上の必要からアルファベットを改良し、これを交易網に乗せて伝播したのはフェニキア人だが、同時にそのフェニキアという一つの民族の生業の中から進化した商業は、アルファベットの普及によって進展した人間の精神の革命によって大きく飛躍する可能性が与えられた。それと同時に商業の発達、人人が普遍的な世界の存在を識り、それによってその精神を変革させていくプロセスを促進する役割も果たすことになるのである。精神革命の進展と商業の発達は相互に作用し合っている。

### 13. 商 業 の 実 験

紀元前1150年頃、カナアンの交易民族に「海の民族」が融合して、航海商業民族が生まれてから約300年間、それはフェニキアの最盛期とも呼ぶべき時代であった。300年に亘って、人口の少ない、国土の小さな一つの民族が、250万km<sup>2</sup>に及ぶ海上商業帝国を築き上げることの出来た主な理由は、その間に彼等を脅かす強力な勢力がなかったことである。この時期、ナイルの河谷にエジプトは



存命していたが、もはや昔日の面影はなかった。北部メソポタミアでは王国の交代が何度となく繰り返されていたが、それもまたフェニキア人には係わりのない出来事であった。むしろ陸上勢力とフェニキアとの間には、交易を通して一種の共生関係が生まれていたのである。

この300年は一つの奇跡であった。歴史はこの300年の間に一つの民族を使って商業を生み出す実験をしたのだった。商業の実験、それは長い間血縁集団や地縁集団の中で生きてきた人々をそこから追い出させ、フェニキア人が繰り広げた交易世界に参加させて、人々の生活の一部を交換によって成り立つ社会を創り上げる実験である。

交換、それは、人々が互いにその生活の一部あるいはその何割かを、それに必要な財貨やサービスを有償的に移転し合うことによって成り立たせようとする行為である。つまり各人の欲望や生活を他者の活動や成果によって充そうという行為、そして各人の活動や成果のある部分を最初からその対価として生み出そうという行為である。この行為は最初社会的行為として始まっているから、その場合には、各社会の欲望や生活を他の社会の活動や成果によって充そうという行為、そして社会の活動や成果のある部分を最初からその対価として生み出そうとする行為だといわなければならないかもしれない。

いずれにしても、交換行為が社会間、別々の社会に属する個人間、そして同一社会内の個人間にも浸透し、やがてそれが、いくつかの社会が再編成されて出来上がった大規模な社会や社会間に浸透していけばいく程、社会や社会間の分業は、互惠や再分配から交換の原理によって統合される方向に進んでいく。しかし交換は自然に成立していくものではない。それを成り立たせる人間や組織や制度が用意されていかなければならないのである。

社会や社会間が交換の原理を採用し、人々の生活を交換によって成り立たせるメカニズムを採用するということは、ここに有償的移転行為を専門に担う人間を登場させることを意味する。交換行為を挟んで分解していく人々の生活は、

移転行為の専門家達によって統合されるのである。実際そうした人々が用意されたからこそ、一つの分業統合原理として交換の可能性が開かれていったのだ。

分業の統合にはたいへんな労力やコストがかかる。しかし交換を分業の統合原理にした社会は、互惠や再分配による社会と違って、分業の統合機能を担う人々に、その労力やコストを補って余りあるだけの利潤の機会を提供するメカニズムを組み込んだ社会なのである。あるいは身分動機に代って利潤動機とそれに基づく営業のチャンスを用意した社会だといっていいいかもしれない。交換が分業社会の統合原理になるにつれて、交換という有償的移転行為を媒介する企業としての商業は発達していく。

社会間の交易が一部商業の色彩を帯び始め、人々の生活がたとえその一部だけでも商業民族を媒介にして成り立つ世界を創造するというのは壮大な社会の実験である。それによって交換世界が拡大すれば、人々が見渡す視野も互惠的世界や再分配的世界よりもはるかに広がり、その広がった視野から個人や社会の位置が自覚され、それとともに人間の精神も変革されていくことになる。そして人々が精神的に個人として独立していけばいく程、交換を原理とした分業世界の可能性は一層広がる。交換世界の拡大とともに、商業もまたその活動余地を広げていくのである。

商業の出現は互惠や再分配という原理によって統合されてきた社会に代って、交換を主要原理にして統合される社会の可能性を開いていく。商業が発達し、交換が分業の統合原理になっていく過程で、それを支える一つの制度として登場してくるのが市場である。市場が広がり深みを増すにつれて、人々は個に分解され、同時にその市場によって統合される細かい分業の網の目の中に組み入れられていくのである。

市場が広がり、交換が分業の主要な統合原理になれば、村落共同体や部族社会、あるいは古代社会の中に生き、これが崩れれば己が生命を保つことができないと信じてきた人々、あるいは社会の何事かに対して強い信仰心を持ち、も

しこの信仰心が揺らげば天地が裂けるという畏怖心を抱いてきた人々まで、その小さな世界に留まることを許さないほどの勢いを持つことになる。

市場の世界はこの稿の主人公、フェニキア人にはあるいはまだ関知せざる問題であったかもしれない。しかし、人類は社会の内外に交換原理に基づく市場システムを組み込んで、これによって無数の人々から構成される複雑な分業生活を統合しようとする人間社会形成のプロセスを辿るのだが、そのプロセスの先鞭をつけたのは彼等であったことに間違いはない。

約 300 年続いたフェニキアの黄金時代は、紀元前 850 年頃に翳りを見せ始め、前 6 世紀の終り頃にシドン、ティロス、ビュブロスといったレバノンの諸都市が独立を失なった時に、かつてのフェニキアの植民地であったカルタゴ (Karthago) が母国から独立し、フェニキアの後継者としてローマの時代まで生き延びるが、紀元前 322 年、アレクサンダー (Alexander der Große) に率いられたマケドニア軍 (die Makedonen) が東アナトリアからエジプトへ向って進軍しようとして、ここレバノンの海岸を通過し終った時に、フェニキアの地中海の海上帝国はこの地上から姿を消してしまうのだ。

注(1) これらの数字は、村田数之亮編「西洋文明の起源」京大西洋史 1 創元社 昭和 49 年版 p. 69 を参考している。

(2) これらの数字は、Hilgemann, Werner, Kettermann, Günter, Hergt, Manfred, dtv-Perthes-Weltatlas, Großräume in Vergangenheit und Gegenwart, Band 8: Mittelmeer, Justus Perthes, Darmstadt und Deutscher Taschenbuch, München, 1976, S. 6 を参考している。

(3) フェニキア人の民族的特質を知る上で最も多くのことを教えられたのは次の文献である。Herm, Gerhard, Die Phönizier, Econ, Düsseldorf・Wien, 1973.

(4) フェニキア人が三つの民族の融合の傑作であったことは、Herm, ibid., S. 9-86 に詳しい。

(5) 村田数之亮 前掲編書 p. 62

(6) ナイルについては、岸本通夫「古代オリエント」世界の歴史 2 河出書房新社

昭和51年版 pp. 164-171 に詳しい。

- (7) 岸本通夫 前掲書 p. 29
- (8) シュメール (Sumer) の地とそれに続くアッカド (Akkad) を合わせて、バビロニア (Babylonia) と呼ぶ。後にこのバビロニアの北西に続く地域に新たに国が建設されていくが、その地方はアッシリア (Assyrien) と呼ばれるようになる。
- (9) セム人については、Herm, *ibid.*, S. 27-30 に詳しい。
- (10) レバノン杉については、Herm, *ibid.*, S. 45-46 に詳しい。
- (11) この考え方については、Herm, *ibid.*, Kap. 4, S. 71-86 に詳しい。
- (12) フェニキア人の海洋航海技術については、Herm, *ibid.*, S. 98-101 に詳しい。
- (13) フェニキアの船については、Herm, *ibid.*, S. 99 に詳しい。
- (14) ビュブロス (Byblos) とパピルス (Papyrus) とのつながりについては、Herm, *ibid.*, S. 66-69 に詳しい。
- (15) このリストは、Herm, *ibid.*, S. 108 のリストを整理し直したものである。因に、Herm のリストの原典は旧約聖書 エゼキエル書 (Das Buch Ezechiel) 第27章 第9—25節である。エゼキエル (預言者) は紀元前 600 年頃、古代バビロニアの首都バビロン (Babylon) に住んでいたとされている。
- (16) 古代フェニキアの海上都市が管理交易 (administered trade) の制度であったことについては、Polanyi, Karl, "The Economy as Instituted Process," in Karl Polanyi et al., (ed.), *Trade and Market in the Early Empires*, The Free Press, New York, 1957, p. 263 で指摘されている。
- (17) フェニキアの産業については、Herm, *ibid.*, S. 109-116 に詳しい。
- (18) フェニキア人によるイスラエルの神殿建設については、Herm, *ibid.*, Kap. 7, S. 117-131 に詳しい。
- (19) Herm, *ibid.*, S. 126.
- (20) Herm, *ibid.*, S. 126.
- (21) フェニキアの航海網と交易網については、Herm, *ibid.*, S. 187-205 に詳しい。
- (22) アルファベットについては、Herm, *ibid.*, S. 252-259 に詳しい。
- (23) 岸本通夫 前掲書 p. 354
- (24) フェニキア文字は22文字、それに対して例えば古代エジプトの象形文字は主なものでも600余り、細部まで入れると3000近くになる。因に、現在欧米では26文字のアルファベット、日本では50音の仮名文字が使われている。
- (25) 人類の「精神革命」の条件については、伊東俊太郎編著「都市と古代文明の成立」人類文化史 2 講談社 昭和49年版 pp. 232-240 に詳しい。

参 考 文 献

- [ 1 ] Herm, Gerhard, Die Phönizier, Econ, Düsseldorf・Wien, 1973.
- [ 2 ] Massa, Aldo, Die Welt der Phönizier, F. A. Herbig, München・Berlin, 1977.
- [ 3 ] Schreiber, Hermann, Weltgeschichte der Seefahrt, Arena, Würzburg, 1973.
- [ 4 ] Hilgemann, Werner, Kettermann, Günter, Hergt, Manfred, dtv-Perthes-Weltatlas, Großräume in Vergangenheit und Gegenwart, Band 8: Mittelmeer, Justus Perthes, Darmstadt und Deutscher Taschenbuch, München, 1976.
- [ 5 ] Samhaber, Ernst, Kaufleute wandeln die Welt, Societäts, Frankfurt (a. Main), 1978.
- [ 6 ] Kienitz, Friedrich-Karl, Das Mittelmeer, C・H・Beck, München, 1976.
- [ 7 ] Grant, Michael, Mittelmeerkulturen in der Antike, C・H・Beck, München, 1974. (Titel der Originalausgabe: The Ancient Mediterranean, Weidenfeld and Nicolson, London, 1969.)
- [ 8 ] Brunner-Traut, Emma, Hell, Vera, Ägypten, 3. Aufl., Kohlhammer, Stuttgart・Berlin・Köln・Mainz, 1978.
- [ 9 ] Brunner-Traut, Emma, Die Alten Ägypter, 2. Aufl., Kohlhammer, Stuttgart・Berlin・Köln・Mainz, 1976.
- [10] Baines, John, Málek, Jaromír, Weltatlas der Alten Kulturen Ägypten, Christian, München, 1980. (Titel der Originalausgabe: Atlas of Ancient Egypt, Elsevier Publishing Projects, Oxford, 1980.)
- [11] Die Bibel, übersetzt von D. Martin Luther, Abi Melzer, 1964.
- [12] Polanyi, Karl, "The Economy as Instituted Process," in Karl Polanyi et al., (ed.), Trade and Market in the Early Empires, The Free Press, New York, 1957, Ch. 13.
- [13] Revere, Robert B., "No Man's Coast: Ports of Trade in the Eastern Mediterranean," in Karl Polanyi et al., (ed.), Trade and Market in the Early Empires, The Free Press, New York, 1957, Ch. 4.
- [14] ウィリアム・キュリカン著「地中海のフェニキア人」世界古代史叢書 8 村田数之亮訳 創元社 昭和49年版 (Original: Culican, William, The First Merchant Venturers, Thames and Hudson, London, 1966.
- [15] 岸本通夫著「古代オリエント」世界の歴史 2 河出書房新社 昭和51年版
- [16] 伊東俊太郎編著「都市と古代文明の成立」人類文化史 2 講談社 昭和49年版
- [17] 村田数之亮編「西洋文明の起源」京大西洋史 1 創元社 昭和49年版
- [18] ヘルムート・ウーリッヒ著「シュメール文明」戸叶勝也訳 佑学社 昭和54

年版 (Original: Uhlig, Helmut, Die Summerer—Volk am Anfang der Geschichte—, Bertelsmann, München, 1976.)

(1981年9月23日 脱稿)

〔付記〕 この小論は1981年6月30日 早稲田大学産業経営研究所主催の研究発表会で発表した「古代商業民族フェニキア人」(Die Phönizier, Handelsvolk der Altertums)を基にして、それを更に発展させたものである。